

34 『啓迪集』の瀉血療法

○友部 和弘・真柳 誠

いわゆる刺絡(瀉血)は針灸治療の一環として、中国系伝統医学で古くから行われてきた。類似の療法は世界各地の伝統医療にもある。日本では十八世紀中頃から刺絡療法が評価され、専書もいくつか著された。これにはヨロツパ式瀉血の影響が大きい。しかし、それ以前に瀉血治療がなかった訳ではない。たとえば曲直瀬玄朔(一五四九〜一六三二)の『処剂座右』、『本邦名医類案』に引く曲直瀬正琳(一五六五〜一六一二)の治験、岡本玄治(一五八七〜一六四五)の『玄治得効配剂』、『玄治百一方』、古林見宜(一五七九〜一六五七)の『見宜翁医案』などに、瀉血を用いた症例が記録されている。

では曲直瀬門下が江戸前期に行っていた瀉血には、いかなる系統・背景があったのだろうか。彼らのルーツた

る曲直瀬道三(一五〇七〜九四)の『啓迪集』(『近世漢方医学書集成』本)を精査し、以下の明らかな瀉血にかんする記述(原漢文)を見いだせた。

一卷四四丁ウラ傷寒門・衄血の証に『医林集要』を引用し、「鼻中を刺して血を出すこと数升にして安んず。或は両尺沢穴より血を出すこと射るが如きは即ち安んず」。二卷五八丁ウラ霍乱門・乾霍乱の証治に『医学正伝』を引用し、「委中穴を刺し血を出すは良法」。三卷一六丁ウラ腰痛門に『医学正伝』を引用し、「瘀血の腰痛は：委中を刺して血を出す、同一七丁オモテに『玉機微義』を引用し、「太陽(膀胱経)の腰痛には委中を刺し、血を出せば効は速かなり」。三卷二二丁オモテ脚気門に『玉機微義』を引用し、「脚気：もし壅がること既に成りて盛んなる者、悪血を刺して其の腫熱を去る」。五卷二五丁ウラ瘰癧門に『玉機微義』を引用し、「呂君玉の妻、年三十にして風搖を病み：銚針を以て百会の穴を刺して血を出すこと二杯、立ちどころに愈ゆ」。五卷四六丁オモテ眼目門に『医林集要』を引用し、「血を出すは太陽陽明に宜し。二経は血の多ければなり。少陽の一経は血を出すこと宜しから

ず。血の少なければなり。太陽陽明を刺して血出れば目
ますます明らかなり。少陽を刺して血出ればますます昏
し」〔同四八丁オモテに『玉機微義』を引用し、「それ眼

に倒睫・拳毛生ずるは…内瞼を攀出して外に向け、速か
に針を以て血を出せば立ちどころに愈ゆ」。五卷六五丁ウ
ラ咽喉門に『玉機微義』を引用し、「走馬喉閉に…砭針に
て出血するにしくは無し、出れば病已ゆ。最も上策と為
す」。六卷二一丁オモテ瘡瘍門に『外科集驗方』を引用し、

「紅糸疔の頭は手足の間に生じ、紅紫一条あり。急ぎ針
を用いて刺断す。然らずんば其の糸心に入り、必ず治し
難し。…凡そ疔を治するに…四辺を刺すこと十余、下し
て血を出さしむ」。六卷四〇丁ウラ癩風門に『玉機微義』

を引用し、「癩風を治すは血を出すに宜し」「一人、風を
病みて面黒く…其の面を刺して大いに墨の如き血を出
す。額より頤に毎刺し、隔日に一刺す…」、同四一丁オモ
テに『玉機微義』を引用し、「癩証は…経絡に悪血の留滯
ある故に或は腫上より、或は委中より血を出すに宜し」。
八卷四一丁ウラ雑病証治篇に『医林集要』を引用し、「重
舌は乃ち心脾の熱なり。蓋し…脾の脈絡は舌下より出ず。

…治法は皆まさに針を刺して其の血を去るべきなり」、同
四二丁オモテに『医学正伝』を引用し、「舌下の紫脈に針
して悪血を出せば即ち愈ゆ」。この一五箇所である。

また曲直瀬道三の『針灸集要』（『針灸医学典籍体系』本
巻下・十六丁ウラ喉痺門にも、「喉舌の疾はみな火に属し、
甚だしくして急なる者は針血が上策なり（原漢文）」の記
載があった。

以上の記載はすべて明代医書の引用、ないし中国医学
理論を背景としている。したがって曲直瀬門下が江戸前
期に行っていた瀉血療法も、おおむね中国医学の系統と
考えてよいだろう。今後は明代医書における瀉血療法に
ついても検討を加えてみたい。

（北里研究所東洋医学総合研究所・医学史学研究所）